

新生



44号

2014.3.30

F164-0003

中野区東中野一―四―二三
電話 FAX 〇三三三六九一六四八八
Eメール shinssei1926day@yahoo.co.jp

日本キリスト教団

新生教会

今ここに ある希望

―― 教会の将来を生かす楽天主義 ――

牧師 土橋 晃

牧師を隠退してしばらくの間、フリーの特権を生かし「主日教会巡り」をした。それぞれの教会が同じ教団であっても様々な違いを持つことに、むしろ福音の豊かさを実感した。

同時に共通点も見えた。それはメンバーの高齢化である。白髪の老婦人が真剣に語りかけてきた。「このままで教会の将来はあるのでしょうか。私たちが召されたら、＼そして誰もいなくなつた＼になるのでは？」と。「教会の将来に希望はあるのか」という問いは、他人事ではなく私

たちの問いでもある。

文学者大江健三郎は、その初期の作品『われらの時代』の主人公にこう語らせた。「希望、それは、われわれ日本の若い青年にとって、抽象的な一つの言葉でしかない」と。かつては、希望への楽天主義が支配していた時代もあった。ところが今や、歴史の進展と共に人間が幸福になり、未来はバラ色だという「希望」のメッキが剥げていることを醒めた目で見つめざるを得なくなっている。キリスト教のキーワードはなにか？と

いう問いに対し、「信仰・希望・愛」と答える人は多い。パウロがコロサイ教会へ宛てた手紙一章三節以下にもそのことが語られている。

希望についてはこう語る。「あなたがたのために天に蓄えられている希望」「あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して聞きました」。この前後には、「希望」は「愛」と「信仰」を基礎づけ、動機づけるものだという言葉もある。さらにこの「希望」は、単なる「抽象的な言葉」ではなく、天に備えられ、私たちのうちに働くキリストを通して明らかにされると語っている。「むなしいだまし事」(二・一八)ではなく、福音として具体的に聞いているというのだ。つまり、既に実現しているキリストの救いの事実裏打ちされた希望だというのだ。「今ここにある」希望だというのだ。

教会員の減少や高齢化は、いやでも私たちが「教会」を問い直す作業へと押し出した。「希望を生む」「希望は欺かない」(ローマ五・三以下)と励ます聖書は、私たちが「希望」へと招いている。「万事が益となる」確信を持って「神が共に働く」(ローマ八・二八)という信仰に基づき、主にある楽天主義者として歩みたい。